

当事者発信の際の留意点

(武蔵野大学人間科学部社会福祉学科教授 小俣智子先生)

当事者が語る貴重な経験は、聴き手の心に真実を届けます。それは多くの仲間、未来の仲間、家族や支援者の助けになります。しかしその一方で、当事者が自らの経験を不特定多数の他者へ語る作業は、覚悟と勇気が要求されるだけでなく、相当なエネルギーと負荷がかかるミッションです。このことを充分理解し、発信者に対して綿密に丁寧にそして手厚い対応をすることが求められます。

1. 発信協力者選定

- ①意思や発表者自身の目的の確認
*今、発信したいかどうか、どのような理由で引き受けるのか
- ②発信の経験(これまで発信の経験があるか)
*語りの経験がある方が望ましいが、発信者の育成という観点から、ボランティアとして会場の雰囲気慣れ先輩発信者の話を聴き、次回発信者として登壇と段階を経る方法もある
- ③発信による影響(発信者自身、取り巻く環境、近親者の反応など)
- ④匿名、撮影、取材の可否
- ⑤直前辞退など不測の場合の対応策 *運営側に代役を務められるスタッフがいると◎

2. 発信への事前サポート

- ①発信形態の確認(口頭、録画)
- ②発信方法の確認(紙資料、PPT、原稿音読など)
- ③発表内容のサポート(発表例の提示、資料作成など)
- ④発表の練習(内容の修正、時間配分など)
- ⑤発信の場への事前参加、見学
- ⑥会場を想定したリハーサル
- ⑦会場配置の配慮(発表位置、司会者との距離、発表前後の席など)

3. 当日のサポート

- ①開始前のミーティング、リハーサル(不安・緊張感解消のため)
*当日や直前キャンセルの配慮
- ②会場配置・動線の確認
- ③発表データ及び資料等の確認
- ④発表時の司会者のサポート(必要時は代わりに返答するなど)
- ⑤会場からの質問への対応(事前募集、質問者の限定など)
- ⑥振り返り(安心して振り返りのできる場の確保・設定)
*部外者などの参加はNG、発信者・ファシリテーター・運営者のみでの実施

4. 終了後のサポート

- ①アンケートの選定(倫理的配慮に欠ける文言がある場合は排除)
- ②発信者にすべて読みたいか、ネガティブな内容は避けるか意向を確認
- ③終了後振り返りの場の設定(発信者の意向を確認の上実施)
*貴重な経験を発信したことの意味について再確認する

シブパネルの開催とそれを支えるガイドラインの策定が持つソーシャルアクションとしての意義

(特定非営利活動法人Social Change Agency 代表理事 横山北斗さん)

1. きょうだい当事者の声を社会に届けるアドボカシーの機能があること

過去、さまざまな当事者の声で社会を変えてきた歴史を振り返った時、シブパネルにおいて、さまざまなきょうだいの方たちご自身の経験を語り、社会にメッセージを発する意義はとて大きいものだと考えます。但し、それは以下2点があつてこそであると考えます。

2. 貴重な経験を開示してくれるパネラーの安心安全が守られていること

ご自身の価値観や生い立ちに密接な影響を与えている経験を語ることにはエネルギーがいることです。語ることで傷つくことや、聞き手の期待に合う言葉を選んでしまい後悔することもあるかもしれません。言葉を語るパネラーの方自身に負担をかけるという可能性もあるからこそ、パネラーの方々が語ること場が安心安全の場であることが必要不可欠であると考えます。

3. 場に多様性があり価値の押し付けをしないこと

自分の経験を話すパネラーの方が、企画側や他者の期待によって語る言葉を強制されないことはとても大事なことです。このような前提があることで、シブパネルの場自体が、排除し合わない、インクルーシブな場の体現することにつながるのではないかと思います。

さいごに

シブパネル開催における上記1-3を備えた「ガイドライン」の策定は、さまざまな当事者の方たちが経験を言葉にする/言葉を社会に発信することを助けるものになると考えます。それゆえ、きょうだいのみならず、さまざまな経験を持つ当事者の方たちが、安心安全が保たれた場で、語り、インクルーシブな場を通して社会にメッセージを発すると言うソーシャルアクションを為す上で、「ガイドライン」はその助けになってくれるとても意義あるものであると思っています。